
魔法少女リリカルなのは～一人の転生者と一人の復讐者～

Ich liebe dich

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはー一人の転生者と一人の復讐者ー

【Nコード】

N6331T

【作者名】

Ich liebe dich

【あらすじ】

転生者』

俺はこの世界が嫌いだ。今すぐに出て行きたいと思ってた。けどそれが「本当になると嬉しいか？」と聞かれたら答えはNoだ
なのにあの神は…
くそガキ

いきなり転生させられても困るっての！？

しかもその世界が【魔法少女リリカルなのは】の世界だなんて・・・
まあ願いがなんでも三つ叶うのはうれしいが

ああもう！こうなりやヤケだ！！やってやる！！！！

復讐者』

私はこの世界が憎い、私を裏切ったこの世界が・・・

だから私は壊す。この世界を【管理】していると思いがっている
奴らとそれに言いなりになっている奴ら、そしてその世界をも！

待っている・・・、管理局！！！！

転生者 s i t e n プローグ 1 (前書き)

初めてなので色々あるかもしれませんがどうか生暖かい目で見守ってください

転生者 s i t e n プロローグ 1

転生者 黒城理苑 s i t e n

俺はこの世界が嫌いだ。今すぐにも出て行きたい、でもそんなことは出来ない

世界を行き来したりとか魔界へ行くための扉とかそんなのは二次元の話だ

ちゃんと理解してる。この事実だけは変えられない何が起ころうともそう俺は思っていた。今この瞬間 2015年10月27日午後20時27分までは…

2015年 10月 27日 午後2時15分

「ふぁー、ねむ…」

現在俺学校へ登校中だ。なんでこんな時間に登校してるかと言うと面倒だからサボった…

そんな事ばかりしてるせいか学校には遅刻の常習犯で目をつけられている

まあそんな事どうでもいいが…

あ！だいぶ遅れたが俺の名前は黒城理苑くろぎょうりおん

自分では普通の高校生だと思っている

まあ最近では二次元に走っているが…（汗

とにかくさっさと学校行って寝よう…

2015年 10月 27日 午後2時47分 屋上

「はぁー、落ち着く…、やっぱここは気持ちいいな

ふぁー・・・、寝よ」

「????」

（この世界は嫌いですか？）

（誰だ・・・？）

（嫌いですか？）

（嫌いだ、大嫌いだ。今すぐにも出て行きたい・・・）

（わかりました。あなたの願いを叶えます）

2015年 10月 27日 午後19時53分 屋上」

「ううん、う・・・？今・・・何時だ・・・？なんだ19時か・・・
って19時！？しかもあとちよつとで20時じゃねえか！

やばいな・・・まあなっちまたには仕方ねえか、帰ろう・・・」

2015年 10月 27日 午後20時19分 黒城家」

「ただいま、って誰もいないけど・・・」

俺の親は二人とも死んじまってるじゃない

母親は俺を産んですぐ死んじまって父親もそれがショックだったの
か後追い自殺しちまった

だから俺は産まれてすぐに施設に預けられた

それから高校生になってからは施設を出て一人暮らし

ピンポン

「こんな時間に誰だ？面倒だから無視しよ・・・」

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピポピポピポ

ザクッ

「がっ……！」

死ぬのか……俺？なんで……？

「また後でね」

バタッ……

転生者 s i t e n プローグ 2 (前書き)

やっと理苑が転生します

これが終わったら今度は復讐者側のプロローグです

転生者 s i t e n プローグ 2

転生者 黒城理苑 s i t e n

「? ? ?」

（ここ・・・どこだ? なんか、暖かくて気持ちいいな...）

「いい加減、起きろ!!」

「ぐふうう!!!!?」

「目、覚めたか?」

「.....」

「あれ? 起きない、もしかしてトドメになったかな?」

「.....」

「仕事しなくて済むし、まっいいか」

「イイワケあるかああ!!!!」

「わっ!!? 蘇った!?」

「お前、今さっき何しやがった!?」

「何って?」

「今さっき俺を殴ったろうが!」

「殴ってないよ?」

「しらばっくれんのかよ!?」

「やったのは飛び膝蹴りだよ?」

「.....」

「わかった?」

「余計.....」

「ん?」

「余計、悪いわあああ!!!!!!!!!!」

「うわぁ!」

その後30分ぐらいこのくそガキと追いかけてこをしていた(結局捕まえられなかったが…)

「???」

「で?ここはどこで、お前は誰だよ?」

「僕?僕は、見ての通り神様さ」

「・・・、バツカじゃねえの?」

「なんだと!」

「わかってんのか?この世界に神なんていないんだよ。んなもん、二次元の話だ。」

まあ、お前が神様だって証明できる証拠があれば別だけだな」

「じゃあ、なにやったら信用するの?」

「そうだな・・・、俺をアニメの世界に連れてってくれたら信用してやるよ」

「・・・」

「どうした?神様ならこれぐらい簡単にできるよな?」

「・・・」

「できないってことは、やっぱペテンかよ?」

「ククク・・・」

「? どうした?頭でもイカれたか?」

「あーはっはっはっは!」

「は?」

「あー、面白かった」

「何がだよ?」

「だって、僕はさっきの願いを叶える為に来たんだよ?」

「さっきって?」

「別の世界に連れて行くって奴」

「ウソだろ・・・？」

「ホント。じゃあ、どこの世界がいい？」

「イキナリ言われても思いつくかよ・・・！？」

「じゃあ、生前君がよく見ていたアニメにしようか？」

「あ、ああ・・・」

「じゃあ、君が生前よく見ていたアニメは・・・」

うん、魔法少女リリカルなのはだね」

「え？」

「だから、魔法少女リリカルなのは」

「マジ？」

「大マジ、拒否権ないからね？決めなかった君が悪いんだから」

「よりによってあそこかよ・・・」

「ただ連れて行くだけじゃつまらないから3つまで願いを叶えてあげる」

「わかったよ・・・」

「案外素直だね、そうゆう人は好きだよ」

「なっちまたんだから仕方ないだろ・・・」

「あ！そうだ、いまさら言う必要ないけどここは天界だよ」

後、転生してから普通に暮らそうとしてたら強制的に面倒に
関わらすからね」

「なんでだよ！！？」

「面白いから！だから、そのあたりも、諦めてね」

「あー、はいはい」

「あとは・・・、そうだ！転生したときの時代はA・sより少し前
からだから」

で、その時の君の歳はこの頃のなのは達と同じ年齢だから」

「わかった」

「願いの方はどうする？今叶えよっか？」

「いや、今なんも思いつかねえからいいや」

は
あ
・
・
・

転生者 *s i t e n* プロローグ2 (後書き)

次はやつと復讐者の方のプロローグです

復讐者 s i t e n プローグ 1 (前書き)

更新、だいぶ遅くなりましたが理由は私の発想力の無さがすべての原因です
すいません

復讐者 s i t e n プロローグ 1

復讐者 氷道岬 s i t e n

私は、見てはいけない『モノ』を見た…

最初はただの気まぐれ、それがこんな事になるなんて…

これがただの夢ならどれだけいいだろうか…？

そう何度も、何度も思った。けど、夢じゃ…なかった

其れはとても現実としては受け入れがたい異質な、とても異質な『モノ』だった…

新暦59年 12月 24日 午後22時22分 時空管理局本局

「ふう…、やっと終わったか」

私は氷道 岬

管理局に所属する局員だ。

私の仕事は主に戦闘メインなのだが、今日に限っては別だった…

この日は特に大きな事件もなく平和な一日…だったはずなのだが
どいう訳か私の机には山のように連なる大量の書類が置いたあつ
た…

上司が言うには今まで私がやっていなかった書類らしいのだが…

どう見ても私の管轄外なものまであった、しかし確かにやってい
なかったのも事実だったので大人しくやることにした…

そして今に至るという訳だ

「もうこんな時間か…、早く帰ろう」

生涯、私はこの時間まで居たことを憎むだろう…
ただの書類整理で大きくとても大きく私の人生が狂わされるのだから…

「ん？　こんな所に扉などあったか？」

それは、とても人間ならとても自然な興味心

「行ってみるか…」

言っただけ好奇心

「結構長いな…」

ごく当たり前で、とても不可解なもの

「これは…！？」

好奇心は猫をも殺す

「これは、いたいなんだ！！」

その意味を今日ここで私は知った…

「シンニユウシャ、シンニユウシャ」

「！？　マズイ、逃げないと…！」

「逃げれると思っているのか？」

「誰だ！？」

「私だよ、忘れたのかな？」

「葉山司令・・・！？」

「キミは素晴らしい部下だったのだが…残念だよ」

「司令…、これはどういうことですか！？」

「どうもこうも、見たままだよ？　このもの全てが管理局の真実だ！」

「そんな…」

「そうだ！私と契約しないか？　岬君」

「……………」

「キミを失うのは僕としてはかなりの損害なのでね。どうだい？」

（私は・・・、私はこんなモノの為に戦ってきたのか？

こんな腐った奴らのために？なぜだ？どうして？）

「キミにとっても悪い話じゃないと思うのだが・・・」

「・・・さい」

「ん？」

「・・・るさい。うるさい・・・、うるさい！！！！」

「ヒッ・・・！！」

「消えてしまえ・・・、死んでしまえ！！！！」

「だ、大至急、第4地下研究所に来い！大至急だ！！」

「死ね・・・」

「ギガッ」

（血が流れてる・・・

なんで・・・

あつそか、私があいつをコロシタからか・・・

じゃあ、逃げないと・・・

道がない・・・、じゃあ作ればいいか・・・）

キュイイイイイイ

とても膨大な力が集中していく

ドゴンッッ

暗がりの中にあつた部屋に月明かりが差し込む・・・

そして月明かりの中へ彼女は去って行った

復讐者 s i t e n プローグ 2

復讐者 氷道岬 s i t e n 『

どこか深い森の中』

（ここは…？私はどうしてここにいる？なぜ？わからない…

わかっていえることと言えば『私が管理局に狙われている』というこ
とぐらいだ

確かめなければ…、本当に管理局は腐っているのかを…）

時空管理局本局前』

（迂闊に出て行って捕まったら厄介だな…、しばらく様子を見てい
るか…）

「…に…てもいが…だよな。ま…か」

（聞こえづらいな…、もう少し近寄ってみるか…）

「岬さんが局員殺しの首謀者だったなんて…」

（なっ…！？）

「優しくていい人だと思っていたのに、ね…」

（どういうことだ！？私はそんな事一切していないぞ！？）

「マジサイテーだよな、平気な顔して裏じゃ俺らの仲間殺して回っ
てたんだしな…」

（しかしなぜ…？）

「貴様はッ…氷道岬だ！！氷道岬がいるぞ…！！」

「！？しまった！」

「逃がさんぞ…！！」

ビュンッ！

局員の魔力弾が岬の右足を貫く

「ぐっ…！ 非殺傷設定じゃない…！？と、とにかく逃げないと…」

「逃がさんと、言っている…！！！」

「うあっ…！」

バタッ

岬の足にバインドがかかり体制を崩して倒れる

ビュン！ビュン！ビュン！

すかさず多数の魔力弾が岬を襲う

「うあああああ…！！！」

「そこまでにしろ…」

「はっ！」

（なぜだ…？この男の声…？聞き覚えがある）

そうして私の思考はブラックアウトした…

「…？？」

「ん…？ ここは…？」

「ようやくお目覚めかい？岬君」

「お前は…！？」

「お前とは…？いぶんないようじゃないか」

「葉山…！」

「大変だったんだよ？体を『再生』させるのは」

「再生…？」

「そうだ『再生』だ。私の中にある世界最高のナノマシン『G・B』ゴッドプレス

「ゴッドプレスの息吹…」

「そうだ！これがある限り私は死なない…！！まさしく神になったのだ…！！！！！」

「馬鹿げてる…」

「あまりそういう発言は控えた方がいい…、ここでは私以外の者は全て無力なのだから」

「ふざけるな…！」

「あまり暴れない方が君のためだよ？」

あまり暴れられるとついバインドの力加減を間違えてしまいそうだからね」

「なっ…！」

岬は自分の体を見ると首・胸・両腕・両手首・腰・両太もも・両ひざ・両足首と体のありとあらゆる場所にバインドがかけられていた
「うう、あああ…（急にバインドがきつく…）」

「ああ…その声、いいよ岬君」

「変態…が」

「あまりそんなことを言わないでくれ。今でも興奮が抑えきれないのに…」

「気持ち悪い…」

「はあ、はあ」

葉山が荒い息をしながら岬に近寄っていく

「く、くる…な（どんどんバインドがきつく…）」

「ふふ、キミはもう私のモノだ…」

ペロッ

「くっ…」

葉山が岬の頬や首、内もも エトセトラ etc. などを舐め始める…

「くう…ああ…」

「感じてるのかい？岬」

（どうする？どうすればいい？だれか…助けて）

「では、そろそろキミの初めてをもらおうかな…」

（こんな奴らに、こんな最低な奴らに…、騙されていた私に腹が立つ…！

復讐したい…負けたくない…罪人を裁く断罪の力が…・…欲しい

!!!!!!」

（その願い叶えてあげる）

（だれ…？）

（君の願いを叶えるもの…）

さあこの力で罪人を断罪しなさい…

神はそれを…赦す）

（光が私を包んでいく…、力が湧く、これが断罪の力。
見たこともないのに…使い方が解かる…）

「な、なんだ！？これは…！！！！」

「これは罪人を断罪するための力…」

「ふ、ふん。忘れたのかね？こ、ここでは私以外のものは無力だと

…」

「けどそれはこの世界の力に対してのみ…」

いけ『superbia』^{ルシファー} ira』^{サタン} avartitia』^{マモン} lu^ア
スモデウス

xuria』罪人を貫け…」

「ぐぎやあああ！！！！」

岬の近くで浮遊している小さなクリスタルのようなものから赤色・

黄色・青色・紫色のレーザー光線が放たれる

「なんだ！？これは！？いったいどうなっている！！！！どこだ！岬、
キミはどこにいる…！！」

「哀れ…、かわいそうだから最後に教えてあげる

この子達の光線を受けたものはその罪に合わせて『感覚』を奪われ
る…

あなたが受けた罪の数は4つ

つまりあなたは今4つの感覚を失った…」

「ば、バカな…！？そんなことが…！！！！」

「あなたとお喋りはこれまで…今度こそさようなら
全ての罪を断罪せよ！『^{ジャッジメント}極光の断罪者』！！！！」

「う、うわあああああ！！！！！！」

シューウウ…

「管理局…、私は今明確な殺意がお前達にある…!!

必ず、その罪…裁いてやる…!!

待っている…!!」

復讐者 *s i t e n* プロローグ2（後書き）

プロローグやっとなつて終わります

氷道岬補足説明1（前書き）

復讐者プロローグ2の最後の所の岬の技の補足説明です

氷道岬補足説明 1

復讐者補足説明

『復讐者』ミナト 氷道 岬が最後に放った断罪の力その一部を説明します

対象者に？七つの大罪？を与える 『七つの大罪』グリモワール

使用者の思考回路へリンクして遠隔操作できる浮遊式の小型魔導砲。使用者の魔力を噴出することで、高密度のレーザー光線のような出力を得る。

七つの小型魔導砲それぞれの多少の個性が存在し、個別に操作することも可能だが多くの魔導砲を自由自在に操るには、複数の思考を同時にこなす高度な精神思考ロジックが求められる。

『シャッジメント 極光の断罪者』

前方に収束させた『七つの大罪』から、七色の輝きを放つレーザー光線を放射する神話魔術。

相手の罪に対して大いなる罰を与えるため、その罪の数に応じて罰の破壊力は変化する。

『ルシファー superbia』

赤色のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は傲慢の罪を背負い、？嗅覚？を奪われる。

『レヴィアタン invidia』

橙色のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は嫉妬の罪を背負い、？固有感覚？を奪われる。

『サタン
ira』

黄色のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は憤怒ふんぬの罪を背負い、
？視覚？を奪われる。

『ベルフェゴール
acedia』

緑のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は怠惰たいだの罪を背負い、
？聴覚？を奪われる。

『マモン
avaritia』

青色のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は強欲じょうよくの罪を背負い、
？触覚？を奪われる。

『ベルゼブブ
gula』

藍色のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は暴食ほっしょくの罪を背負い、
？味覚？を奪われる。

『アスモデウス
luxuria』

紫色のレーザー光線を放つ。

傷つけた相手は色欲しきよくの罪を背負い、
？痛覚？を奪われる。

氷道岬補足説明1（後書き）

と、まあこんな感じですが…書いてても思いますね
なかなかチートだと…

まあ今私が考えないといけないのは次話ですが…（汗
それでは

第1話 イキナリ転生させられたらなにする？（前書き）

サブタイトルはネタ（笑）です

第1話 イキナリ転生させられたらなにする？

転生者 黒城理苑 s i t e n

新暦65年 9月 21日 午前9時29分 海鳴市の山の中？

ヒュウウウ…

バキ！！バキ！！バキ！！ ドサッ！！

「…。」

「あの、大丈夫？」

「……。」

「あの！起きて！」

「……ん？」

「起きた？」

「だれ……だ……？」

「私、高町なのはだよ」

（……！！ ……白き悪魔がなんでここに！？ ヤバい！どうする！？）

「大丈夫？イキナリ上から降ってきたんだもん、ビックリしたよ……」

「ハンマー・シュラーク……！！（滝汗）」

「なのッ……！！」

ドサッ！

「今だ！逃げる……！！」

（マスター理苑、なぜ逃げる必要が？）

「そりゃあ……、全力で殴っちまったからだろ？」

（では、なぜ殴る必要があったのですか？）

「それは、怖いからに決まってるだろっ！」

（ですが、相手は初対面のしかも女の子ですよ？）

「ティレス…、お前は知らないだろうけどあいつはこの世界じゃ白き悪魔と呼ばれている気違い魔法使いだ」

（そうですか…、わかりました。ところでマスター理苑）

「ん？」

（何処までお逃げになるおつもりですか？）

「どこって海鳴に決まってるだろ？」

（ならばもう走る必要はないのでは…？）

「え？」

（もう既に海鳴の住宅街ですが…）

「マジで!？」

（今回でわかりました。マスター理苑は状況判断能力がとて…焦ったり慌てたり急いでいると全く周りが見えない、典型的なヤラレ役だと）

「返す言葉もございません…」

（そんな事ではこの世界では生き残れませんよ？）

「？　なんでお前そんなこの世界の事詳しいだよ？」

（マスター理苑の記憶を拝見させていただきました）

「そんなこともできるの!? おまえ」

（はい。まあ瑣末なことですが）

「まあいいや…、でどうしようこれから」

（どこか寝泊りできる場所を探したほうがいいでしょう）

「だよな…、でも俺この世界に知り合いなんていねえし」

（つくったらいじゃないですか）

「メンドイからパスっと」

「きゃっ」

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫や」

「!（八神はやて…!　なんで俺はこうも危険人物とばかり会っんだ

…！)

だ、大丈夫ならいいんだ、それじゃな」

「あ、うん…（なんかあんまみいへん子やなあ・・・）」

（ダッシュ…！！）

「すっごいはやいなあ…」

「俺もこの世界いや…（涙」

第2話 筋肉との接し方ってどうすればいいの？（前書き）

サブタイトル 笑えば、いいと思うよ…。

第2話 筋肉との接し方ってどうすればいいの？

転生者 黒城理苑 s i t e n 』

新暦65年 9月 21日 午後22時7分 海鳴市の森の中 』

グウウウウウ…

「腹減った… ティレス、飯」

（ありませんよ、そんなもの）

「なんでだよ！…！」

（私にキレないでください…、余計にエネルギーを消費しますよ？）

「ん？なんか…いい匂いする」

（マスター理苑、お気を確かに！）

「魚だ…、焼き魚の匂いがするううう！…！」

ドドドド…！！

（こんな時だけ元気ですね…マスター理苑）

「サカナアアア…！！！！サカ…ナ？」

「なんじゃい、お前」

そこには筋肉がいた…

「イキナリ黙り込むなや」

「筋肉だ…」

「ん？」

「筋肉がいる…！！！！！！！！！！怖いよ…！！！！！！！！」

「誰が筋肉じゃあああ…！！！！！！！！！！」

「反応してる時点でオマエだろ…！！」

「ワシはただの筋トレが好きな一般人じゃ！」

「うわあああ！！発言がもう筋肉だよおおお！！！！！！」

「てか、筋肉ってなんじゃい！」

「筋肉に筋肉の事をつつまれた!？」

「とにかく落着けや！」

グウウウ!

「はっ！」

バタッ

「なんじゃ!？どうした!？」

「は、腹…へ…ッた」

「うめー!まじうめえよー!」

「そうか、そりゃよかったわ」

「そういふあほへえはんへほんなどほろでふたんら？」

(翻訳：そっぴやなんでおめえこんな所にいたんだ?)「

ん?それはやな・・・、氣が付いたらここにおつてヒマヤから筋トレしとったんじゃ」

「ふへえー」

「そっぴや、お前名前は？」

「俺?俺は理苑だ。お前は？」

「ワシか?ワシはテッサイじゃ」

「テッサイか・・・、じゃよろしくテッサイ」

「おう!よろしゅうな」

「じゃ!俺行くわ」

「ここらへんは物騒やけん氣が付けや」

「おう!テッサイも筋トレがんばれよ!」

「じゃあの!」

「テッサイか・・・、いい奴だな」

(そうですね、脳筋なマスターとの相性は良さそうですね)
「お前俺の事嫌いだろッ!!」

第2話 筋肉との接し方ってどうすればいいの？（後書き）

私にとってはロースタートですね

第3話 断罪の翼の矛と楯（前書き）

今回は復讐者視点です
復讐者に仲間が・・・

第3話 断罪の翼の矛と楯

復讐者 氷道岬 *Siten*」

新暦65年 9月17日 午後23時33分」

「罪深き罪人に断罪の光を・・・」
「うあああ——！！！」

「今日はこれで終わりが・・・」

私はあれから6年間、一人で局の研究所を潰してきた
その為に技を磨き、技の工夫を試みたりなど様々な事をしてきた
負けるわけにはいかないから・・・
私がここで負けて消されてしまったら局を止めることなどできなくなってしまう

そんな事は許されない、許さない
だが最近になって局も少しずつだが戦いにくくなっている気がする
気のせいかな？

「見つけたぞ！氷道岬！この！新兵器でお前を「うるさい」「
ビュン！」

「うぐっ！め、目が・・・」

「消え去れ・・・」

ビュンビュンビュン

「ぎゃあああ！！！」

「はあ、はあ」

なぜだ？なぜこんなにも疲れるのだ…？わからない
ザッザッ…

「誰だ！？」

「警戒しなくても結構ですよ？私たちは味方ですから」

そう言いながら出てきたのは綺麗なそれこそ春に咲き誇るとても大きなサクラを想像させるような笑顔と桜の花のような髪飾りをした女の子とそれとは対照的な眼鏡を掛けた、男と関わりが無い私から見ても『整った』という形容がふさわしい顔立ちが鮮明になってくる。蔵かで、うつすらと冷たい雰囲気。男の印象は例えるなら、誰もいない雪の教会に似ていた。

「お前たちは・・・？」

「その疑問はもつともですね」

眼鏡を掛けた青年が言う

『蔵かで、うつすらと冷たい雰囲気』

あれは、嘘だ。蔵かという感じではない。態度は柔らかいし、紳士的ですらある。

でもやはり、冷たい。

まあたつた一言二言話した程度でこんな印象を勝手に抱くのは失礼かもしれない…

「私たちは貴女にチカラを与えた人から頼まれてきた仲間なんだよ」

「仲間・・・？」

「そう、一人ではツライかもしれない手伝ってあげて、と言われて」

「じゃあ、強いのお前たちは」

「もちろんだよ！」

「当たり前です」

「そう。でも私には強いかと問われて強いと答えるヤツらは信用しないと決めているの」

「では、どうすれば認めて頂けますか？」

「私と戦って勝てたなら信用してあげてもいいわ」

「それは実に簡単な…」

「でもほんとにいいの？」

「余裕かましていたら死ぬわよ！」

ビュン

言い終わると同時に黄色のレーザー光線を放つ！

「この様な単調な攻撃程度なら私一人で十分です」

が、軽々と眼鏡の青年に避けられる

桜の髪飾りをした女の子は戦闘を眺めている

二人ともとても余裕の表情だ…

（なんだこの二人は・・・？）

そんな考え事をしていたせい岬に大きな隙ができてしまい・・・

「隙だらけですー！！」

「ぐっ、うあああー！！」

大きく吹き飛ばされ木にぶつかる

「がっ…」

「大丈夫ですか？」

「……………」

「お嬢様？」

「私の…………負けた」

「では…」

「うん、お前たちの同行を認める…」

「やったあ！」

とても大げさに喜ぶ少女と

「ふふ…」

静かに笑う青年が仲間になった

「ところで二人に名前は…………？」

「ないよ？」

「じゃあどう呼んだらいいんだ？」

「お嬢様の好きなようにお呼びください」

「じゃあ、お前はサクラ」

「わたし？」

「そうだ。でお前が咲夜だ」

「畏まりました、お嬢様」

「じゃあわたしはこれからはマスターの矛となるんだよ」

「私はお嬢様の楯となりましょう」

「わかった。よろしく頼む、…ところでさっきから言っているお嬢様とはなんだ？」

「もちろんお嬢様はお嬢様です」

「私か！？」

「はい。それ以外にだれが？」

「うう・・・、その呼び方やめろ」

「畏まりました。ではみさきさん、とお呼びします」

「ああ、頼む」

「じゃあ、マスター次の目的地は？」

「ああ、地球に行こうと思ってる」

「わかったんだよ」

「では参りましょう。みさきさん」

「ああ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331t/>

魔法少女リリカルなのは～一人の転生者と一人の復讐者～

2011年10月9日03時48分発行